

保育者による絵本読み聞かせ場面の観察に基づく保育学生の学び  
—保育実習後の質問紙調査の質的分析から—

川口 めぐみ<sup>1</sup> 日光 恵利<sup>2</sup>

Learning of Early Childhood Education Students through Observations of  
Picture Book Read Aloud Sessions by Teachers  
—A Qualitative Analysis of Post-Practicum Questionnaire Responses—

KAWAGUCHI Megumi NIKKO Eri

要約

本研究は、保育学生が保育実習中に観察した絵本の読み聞かせ場面から得た学びを明らかにし、今後の実習指導への示唆を得ることを目的とした。176名の学生を対象に調査を実施し、自由記述の質的分析により、【読み聞かせの技法】、【読み聞かせの環境構成】、【絵本の種類や選定方法】、【読み聞かせ前後の保育方法】、【子ども理解】の5つの概念カテゴリーが抽出された。結果から、学生は読み聞かせの技術だけでなく、保育環境や子どもの反応、絵本の活用方法など多面的に学んでいることが明らかとなった。今後は、模擬保育や演習の機会を通じて、学びを実践へと発展させる教育的支援の充実が求められる。

キーワード：絵本の読み聞かせ、保育実習、学生の学び

Abstract

This study aims to clarify what early childhood education students learn through observing picture book read aloud sessions during their teaching practicum and to provide suggestions for future practicum guidance. A total of 176 students participated in the survey. A qualitative analysis of their open-ended responses led to the extraction of five conceptual categories: techniques of reading aloud, environmental arrangement for reading aloud, types and selection of picture books, childcare practices surrounding read-aloud activities, and understanding of children. The results revealed that students not only learned reading techniques, but also developed multifaceted insights into the childcare environment, children's reactions, and the effective use of picture books. It is suggested that further

---

受理年月日：2025年11月28日

<sup>1</sup> 高松大学発達科学部准教授 <sup>2</sup> 富山短期大学幼児教育学科講師

educational support should be provided to help students apply these areas in practice simulated childcare and practical exercises.

Keywords : picture book reading aloud, teaching practicum, student learning

## 1. 研究目的

### 1.1 乳児における絵本の読み聞かせの意義

乳幼児期は、言葉の獲得や情緒の安定、社会性の芽生えなど、人格形成の基礎が築かれる極めて重要な時期である。この時期の保育において、「読み聞かせ」は多くの保育現場で日常的に行われており、単なる娯楽ではなく、子どもの心と言葉、感性、社会性を育む教育的な営みとして位置づけられている。

保育所保育指針（厚生労働省, 2017）では、3歳以上児の言葉の獲得に関する領域「言葉」のねらい③として、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。」が挙げられている。このように、絵本や物語と出会うことは、言葉の楽しさや美しさに触れ、他者と気持ちを通わせる貴重な機会であることがわかる。また、保育所保育指針解説（2018）では、「子どもが絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを保育士等や友達と共有したりすることが大切である。このような経験は、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な言葉の表現を使うことができるようになる上でも重要である。」と述べられており、読み聞かせが子どもの想像力や感情、対人関係の発達に寄与する総合的な経験であることが示唆されている。読み聞かせを通して、子どもは登場人物に感情移入し、自分の体験と重ねながら物語を理解していく。そして、保育者や友達とのやりとりの中で、自らの思いや考えを言葉で表現する力を育てていく。また、集団で物語を共有する経験は、共感や対話、そして共に楽しむ感覚の発達にもつながる。

保育実践の視点からは、横山ら（2008）が読み聞かせの意義について、「保育者と子どもの安定した信頼関係の上に成り立つ共有体験であること」や、「子どもの生活と連続した絵本の読み聞かせの重要性」を指摘している。また、「日常を離れた空想世界を楽しむ体験」の価値にも触れており、読み聞かせが子どもの現実世界と空想世界をつなぐ架け橋となる可能性があることを示している。

さらに、雨越ら（2020）は、5、6歳児を対象に、同一絵本を3、4日反復する工夫をして読み聞かせた実験群と、通常通り毎日異なる読み聞かせを行った統制群を比較し、反復読みを行った実験群の語彙力が有意に上昇したことを明らかにしている。この結果は、読み聞かせの実施自体ではなく、同じ絵本を繰り返して読むという方法の工夫が、語彙の習得に有効である可能性を示している。

以上のように、絵本の読み聞かせは、子どもの言葉の感覚、想像力、感情表現、そして他

者とのつながりを育む多面的な意義を持っている。保育現場における日常的な実践としての価値は高く、また保育者にとっても子どもとの関係を築き、学びを支える重要な手段である。

したがって、読み聞かせは保育における基礎的かつ本質的な実践であり、保育者や保育学生がその意義と技術を深く理解し、適切に活用していくことが求められる。

## 1.2 保育現場における読み聞かせの実際

保育現場において、絵本の読み聞かせは日々の保育活動の中に組み込まれており、乳幼児にとって身近で親しみのある時間となっている。多くの保育所や認定こども園では、午睡前やおやつ後、自由遊びの導入時などに読み聞かせを取り入れ、子どもたちの情緒の安定を図る実践として定着している。読み聞かせは、単に物語を聞かせるだけでなく、子どもと保育者が言葉や気持ちを通わせる対話のきっかけとなり、信頼関係の構築にも寄与している。こうした実践は、言語発達にとどまらず、想像力や感性、さらには社会性の育成にもつながるものであり、読み聞かせがもつ教育的意義の高さを多くの保育者が実感している。

並木（2012）は、幼稚園の4歳児クラスにおける絵本の読み聞かせで、保育者の動作や発話が幼児の発話に与える影響を分析している。その結果、幼児が安定して絵本に集中できる環境、登場人物の感情や絵の描写に関する発話、間を取る工夫が発話を促進することが示された。さらに、読後に幼児の気づきを共有することが、絵本への興味やクラスの一体感を高める重要な要素であるとしている。これは、読み聞かせが保育者の技術や感性によって質が大きく左右される実践であることを示唆している。

さらに、佐々木ら（1994）は、事前に絵本の構成やテーマを検討した後の読み聞かせでは、表現力や子どもの気持ちをつかむ力が改善し、保育歴の長さよりも準備と理解が重要であると結論づけられている。すなわち、絵本の読み聞かせは、「読み手が対象絵本を深く読み取り、共感すること」が重要であることを示しており、保育者自身の絵本に対する理解と感情のこもった読み方が、子どもの心に影響を与えることを強調している。

このように、保育現場での読み聞かせは、単なる保育技法にとどまらず、保育者の力量・感性・子ども理解が問われる実践であるといえる。とりわけ保育学生にとっては、実習などを通じてその現場に触れ、読み聞かせの意義と難しさの両方を体験的に理解していくことが重要である。

そこで本研究では、保育実習における保育者の読み聞かせ場面から、保育学生がどのような学びを得ているのかを明らかにし、今後の実習指導のあり方について考察することを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象者

本研究の対象は、保育者養成課程に在籍する学生176名である。内訳は、短期大学に在籍する学生116名（1年生51名、2年生65名）および大学に在籍する学生60名（2年生28

名、3年生32名)であった。いずれも保育者を志す学生であり、日常的に絵本や保育実践に関心をもって学習している者である。

## 2.2 調査手続き

調査は2024年12月、執筆者が担当する各授業の一部時間を活用して実施した。執筆者を通じて調査の趣旨を説明し、協力の同意を得た上で、依頼書に記載されたQRコードを用いてオンライン形式で回答を求めた。回答は無記名とし、個人が特定されないよう配慮した。

## 2.3 調査内容

本調査では、以下の2つの側面について質問した。

- ①幼少期における絵本とのかかわりやその経験に基づく現在の意識
- ②保育実習における絵本の読み聞かせ場面の観察を通して得た学び

これらの設問は、保育現場での実務経験を有する共同研究者である執筆者2名が、先行研究および教育実践の知見を踏まえて作成した。

## 2.4 分析方法

自由記述の回答については、佐藤(2008)による質的データ分析法に基づいて分析した。また、量的データについてはt検定を用いて比較分析を行い、統計処理にはSPSS Statistics 26.0を使用した。分析にあたっては、回答の文脈を尊重しつつ、内容の妥当性と一貫性に留意した。

## 2.5 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、調査の目的・方法・データの取り扱い等について、書面および口頭で十分に説明を行った。そのうえで、研究への協力・参加は任意であること、回答内容が研究目的以外に使用されないことを明示し、同意を得た。

# 3. 結果と考察

## 3.1 調査対象者の実習経験の割合

有効回答が得られた保育学生176名の保育実習経験については、Table 1に示す通りである。内訳は、保育実習Ⅰのみを履修した学生が91名(51.7%、A群)、保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱもしくは保育実習Ⅲを履修した学生が85名(48.3%、B群)であった。

Table 1 調査対象学生の保育実習経験

対象学生	(内 訳)	分類
短大1年生	保育実習Ⅰのみ履修 (51名)	A群
短大2年生	保育実習Ⅰのみ履修 (6名)	A群
	保育実習Ⅰ及び保育実習ⅡもしくはⅢを履修 (59名)	B群
大学2年生	保育実習Ⅰのみを履修 (28名)	A群
大学3年生	保育実習Ⅰのみを履修 (6名)	A群
	保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱを履修 (26名)	B群
合計		176名

### 3.2 幼少期の絵本に関する経験について

幼少期の絵本に関する経験について、各質問において「とてもあてはまる:5」「あてはまる:4」「どちらでもない:3」「あまりあてはまらない:2」「あてはまらない:1」の5件法で回答を求めた (Table 2)。その結果、幼少期に絵本を好み、頻繁に読み聞かせを受けた経験を有する学生が比較的多い傾向が認められた。

Table 2 幼少期の絵本に関する経験について

	平均値	SD
絵本は好きでしたか。	4.12	1.04
絵本をよく読んでいましたか。	3.81	1.26
よく絵本の読み聞かせをしてもらいましたか。	4.10	1.00

### 3.3 現在の絵本に関する意識について

保育学生の現在の絵本に関する意識について、「①絵本が好きですか。」「②日頃から絵本を読んでいますか。」「③絵本の読み聞かせは好きですか。」「④絵本の読み聞かせは得意ですか。」「⑤子どもたちに向けて積極的に絵本の読み聞かせをしたいと思いますか。」「⑥絵本の読み聞かせについてもっと勉強がしたいですか。」の6項目の質問を行った。各質問は「とてもあてはまる:4」「あてはまる:3」「あまりあてはまらない:2」「あてはまらない:1」の4件法で回答を求めた。また、保育学生の絵本に関する意識と保育実習経験との関連を検討するため、t検定を行った (Table 3)。

その結果、6項目のうち、「④絵本の読み聞かせは得意ですか。」においてのみ、実習経験の多い学生 (B群) が有意に高い得点を示した。これは、保育実習を通じて実際に読み聞かせを行う機会が増えることで、技術的な自信やスキルが向上する可能性を示唆している。一方で、その他の項目では有意差が認められず、絵本への好意や日常的な読書習慣は実習経験

に依存しないことが明らかとなった。

さらに、学生は、「絵本の読み聞かせについてもっと勉強したい」と強く望んでいるにもかかわらず、「日頃から絵本を読んでいる」割合は低い傾向にあった。この結果は、絵本に関する知識や技術の習得意欲は高いものの、日常的な絵本との接触が不足している現状を示している。したがって、保育者養成課程においては、実習だけでなく、日常的に絵本に触れる機会を意図的に設けることが重要である。例えば、授業内での絵本紹介や自主的な読書活動の促進、絵本に関するワークショップの実施などが有効な方策となり得ると考える。

総じて、実習経験は読み聞かせの自信向上には寄与するが、絵本への親しみや習慣形成には別の教育的アプローチが必要であることが示唆された。

Table 3 保育学生の現在の絵本に関する意識

質問項目	実習経験	度数	平均値	SD	t値	有意確率
①	A群	91	3.07	0.63	-1.47	n. s.
	B群	85	3.22	0.71		
②	A群	91	1.86	0.71	-0.48	n. s.
	B群	85	1.91	0.77		
③	A群	91	2.86	0.69	-0.60	n. s.
	B群	85	2.92	0.73		
④	A群	91	2.28	0.70	-3.39	p<.05
	B群	85	2.67	0.82		
⑤	A群	91	3.14	0.76	0.18	n. s.
	B群	85	3.12	0.74		
⑥	A群	91	3.28	0.73	-0.24	n. s.
	B群	85	3.31	0.69		

#### 3.4 実習中の読み聞かせ場面の観察と学びの分類

保育実習中において、保育者がクラス等の集団において絵本の読み聞かせをしている場面を観察した学生は、全体176名中172名(97.7%)であった。これは、絵本の読み聞かせが、実習先の保育現場において広く実施されている実践であることを示している。

また、読み聞かせ場面の観察から得られた学びについては、「観察場面から絵本の読み聞かせについてどのようなことを学びましたか？具体的に書いてください。」という自由記述形式の質問を用いて、直近の保育実習に関する回答を収集した。なお、回答は複数記述しても差し支えないことを事前に伝えている。それらを質的分析した結果、176名のデータから、571のコードを抽出し、【読み聞かせの技法】、【読み聞かせの環境構成】、【絵本の種類や選定方法】、【読み聞かせ前後の保育方法】、【子ども理解】の5つの概念カテゴリーに分類された(Table 4)。なお、本文中では、コードを〈 〉、カテゴリーを『 』、概念カテゴリーを

【 】で示している。

#### 【読み聞かせの技法】

この概念カテゴリーは、『読み方の工夫』、『子どもへの目線』、『応答的な関わり』、『絵本を動かす』、『表現方法の工夫』、『絵本のめくり方』の6つのカテゴリーから生成された。

『読み方の工夫』では、絵本を読み進める際に、〈声の強弱〉や〈抑揚〉、〈間の取り方〉といった音声表現を意図的に操作することで、子どもが絵本の世界に入り込みやすくなることを実習を通して学んでいた。これにより、読み聞かせが単なる情報伝達ではなく、子どもの情緒や想像力を刺激する重要な手法であることを理解している様子がうかがえた。『子どもへの目線』については、〈子どもの反応を確認〉、〈子どもの様子の見守り〉を通じて、子どもが内容に集中できているかを把握する姿勢が見られた。また、〈反応がある子どもばかり見ない〉という視点からは、特定の子どものみを注視するのではなく、集団全体に目を配る必要性を認識する学生も存在し、読み聞かせにおける公平な関わりの重要性を理解していたことが分かる。『応答的な関わり』のカテゴリーでは、〈子どもへの問いかけ・クイズ〉や〈子どもの反応の受け止め・共有〉といった、保育者の積極的な働きかけが、子どもの参加意欲を高め、保育者と子どもとの間に一体感を生み出す要因となることを学んでいた。これにより、読み聞かせが双方向的なコミュニケーションの場として機能することが示唆される。『絵本を動かす』については、〈視覚的に楽しめるよう動かす〉ことや、〈ストーリーに合わせて絵本を傾ける〉ことで、子どもが内容をイメージしやすくなり、楽しんで絵本を読むことができることを学んでいた。一方で、これらの工夫はイメージを膨らませる効果がある反面、表現の仕方によっては絵本本来の世界観を損なってしまう可能性もあるため、子どもの反応を丁寧に読み取りながら、適切に取り入れていくことが重要であると考えられる。子どもの『表現方法の工夫』においては、対象年齢や絵本の内容に応じて〈表情を変える〉、〈ジェスチャーを入れる〉などの視覚的表現を加えることにより、物語の臨場感を高め、子どもの注意や理解を促進する方法を習得していた。『絵本のめくり方』では、子どもの興味を引くために〈ゆっくりめくる〉ことや、子どもの創造力を損なわないよう〈手が絵にかからないようにめくる〉ことに配慮する重要性を学んでいた。これらの分析結果から、学生は読み聞かせにおける多様な技法を観察を通して学び、その効果や意義を理解していたことが明らかとなった。読み聞かせは単なる朗読行為ではなく、子どもの発達段階や集団の状況に応じた柔軟な技術の活用が求められる実践であることが再確認された。

#### 【読み聞かせの環境構成】

この概念カテゴリーは『絵本の持ち方の工夫』、『雰囲気づくり』、『保育者の位置』、『子どもの位置』、『事前準備の重要性』の5つのカテゴリーから生成された。

『絵本の持ち方の工夫』においては、〈絵本の高さ〉や〈絵本の角度〉を読み聞かせの前に確認し、子ども全員が絵本の絵や文字を見やすくなるよう配慮することの重要性を学生は学んでいた。これは、視覚的なアクセスの平等性を確保するための基本的な配慮であると

いえる。『雰囲気づくり』の 카테고리では、〈静かな環境〉の整備や、〈落ち着いた雰囲気〉の演出といった、子どもが集中しやすい心理的・物理的環境を構成することの重要性が認識されていた。読み聞かせが成立するためには、外的刺激を最小限に抑える環境調整が求められることを、実習を通じて体感していたと考えられる。『保育者の位置』では、〈子ども全員に見える位置〉に保育者が座ることで、子どもたちが視線を集中しやすくなるとともに、保育者自身も〈全体が見える位置〉にいて、子どもの反応や姿勢などを把握しやすくなるという双方向的な視点の重要性が学ばれていた。さらに、『子どもの位置』では、〈子どもの位置の確認〉を行い、子どもを絵本が見やすい位置に移動するように言葉かけをしている姿から、一人ひとりの見え方に配慮しながら、全ての子どもが絵本に参加できるよう工夫することを学んでいた。また、一部の学生は、『事前準備の重要性』として、〈事前に絵本を読むことの大切さ〉を挙げており、内容把握を通じて読み方や間の取り方、ページをめくるタイミングなどに工夫が生まれることに気付いていた。これらのことから、学生は読み聞かせを実施する際の環境構成が子どもの集中力や理解に大きく影響することを理解し、より効果的な保育実践の基盤となる視点を習得していることが示された。

#### 【絵本の種類や選定方法】

この概念カテゴリーは『絵本の選定』と『絵本の種類』の2つのカテゴリーから生成された。

『絵本の選定』には〈年齢や発達に適した絵本の選定〉や〈季節に合わせた絵本の選定〉、〈活動・行事に合わせた絵本の選定〉といったコードが多く見られた。これらから、学生は絵本を単に読み物としてではなく、子どもの生活リズムや当日の保育活動、さらには年間の行事計画との関連を踏まえて選定する重要性を認識していることがうかがえる。一方、『絵本の種類』は、〈低年齢児は音や絵を楽しむ絵本が多い〉という記述に代表されるように、音（オノマトペ）やリズムを多用した絵本、またわらべ歌などを取り入れた絵本が存在することを実習を通じて知った学生がいた。特に、乳児や1～2歳児においては、言葉の意味よりも音やリズム、視覚的な要素を重視した絵本が有効であるという理解が深まったと考えられる。

#### 【読み聞かせ前後の保育方法】

この概念カテゴリーは『導入方法』、『読み聞かせ後の振り返り』、『読み聞かせのタイミング』の3つのカテゴリーから生成された。

『導入方法』は、〈歌や手遊びをする〉ことで、子どもの注意を絵本に向けたり集中させたりすることができることを学んでいた。『読み聞かせ後の振り返り』では、〈クイズをする〉ことや〈感想を話す〉ことを通じて、絵本の余韻を楽しみ、子どもの発想や言語表現を促す意義を理解していた。『読み聞かせのタイミング』は、子どもたちに〈落ち着いて欲しい時〉や、次の活動へ移行する〈活動の切り替え場面〉に読み聞かせを行うことで、保育の流れを円滑にすることができることを学んでいた。以上の学びから、学生は絵本の読み聞かせを単

なる一時的な活動ではなく、保育の流れに組み込むことで、子どもの興味や発達を支える重要性を認識していることが示された。

#### 【子ども理解】

この概念カテゴリーは『子どもの姿』、『発達への理解』、『絵本の効果』の3つのカテゴリーから生成された。

『子どもの姿』は、保育者の技法や動作に焦点を当てるのではなく、〈子どもが夢中になる姿〉や〈楽しむ子どもの様子〉といった子どもの反応や態度に着目している。学生は、絵本に集中して耳を傾ける子どもの姿から、絵本が注意を引きつけるとともに、情緒を安定させる効果を持つことを学んでいた。『発達への理解』は、読み聞かせの最中に、年齢によって子どもが文字を読んだり、自分の生活に関する話を読み聞かせの内容に関連付けて語ることもあったりするなど、そうした場面を通して〈子どもの反応から発達に気付く〉ことができることを学んでいた。また、『絵本の効果』については、〈子どもとコミュニケーションが取れる〉や〈子どもの発達が感性を育む〉といったコードから抽出され、絵本の読み聞かせが子どもの認知・情緒・言語発達を促す有効な手段であることへの理解が見られた。特に、言語の獲得や想像力の育成、情緒の共感といった側面に対する教育的効果を意識する記述も認められた。これらの学びを通じて、学生は絵本の読み聞かせを単なる娯楽的な活動ではなく、子どもの発達を支える教育的・発達の意義を持つ実践として捉える視点を獲得していることが示された。

以上の5つの概念カテゴリーの分析結果および考察から、学生は単に読み聞かせの技法を学ぶにとどまらず、子どもが読み聞かせを楽しむための環境構成の工夫や、子どもの生活やその日の活動の流れを踏まえた保育実践の在り方にも着目して観察を行っていることが明らかとなった。

学生は、読み聞かせが保育の中で果たす多面的な役割を捉え、保育者の技術のみならず、子どもの姿、関わり方、場の設定、教材の選定といった要素が相互に関連し合う複合的な実践であることを理解している様子がうかがえた。このような観察視点の広がりや、今後の保育実践における実践的・教育的力量の形成に資する重要な学びであるといえる。

Table 4 読み聞かせ場面の観察からの学びの分類

概念 カテゴリー	カテゴリー名	コード名（代表的なもののみ表示）
読み聞かせの技法	読み方の工夫	声の強弱 抑揚 声の大きさ 登場人物などで声色を変える 読む速さ 間の取り方 はっきり読む
	子どもへの視線	視線 子どもの反応の確認 子どもの様子の見守り 子どもの表情を見る 子どもの目を見て読む 反応がある子どもばかりを見ない
	応答的な関わり	応答的に進める 子どもへの問いかけ・クイズ 子どもの反応の受け止め・共有 子どもへの言葉かけ 解説・説明する コミュニケーションをとる
	絵本を動かす	集団を意識する 視覚的に楽しめるよう動かす ストーリーに合わせて絵本を傾ける
	表現方法の工夫	表情を変える 童謡や手遊びを交える 体を動かして読む ジェスチャーを入れる 楽しそうに読む 指さしする
	絵本のめくり方	ゆっくりめくる 手が絵にかからないようにめくる
読み聞かせの環境構成	絵本の持ち方の工夫	絵本の高さ 絵本の角度 絵本の見せ方 見やすい絵本の持ち方
	雰囲気づくり	楽しさ 静かな雰囲気 集中できる環境 落ち着いた空間
	保育者の位置	子ども全員に見える位置 全体が見える位置 子どもが見える高さ 保育者の位置の背景
	子どもの位置 事前準備の重要性	子どもの位置の確認 事前に絵本を読むことの大切さ
絵本の選定方法や	絵本の選定	人数に適した絵本の大きさ 子どもが興味がある絵本を選ぶ 年齢や発達に適した絵本の選定 季節に合わせた絵本の選定 子どもが選んだ絵本を読む ねらいを持った絵本の選定 活動・行事に合わせた絵本の選定
	絵本の種類	年齢によって絵本が異なる 低年齢児は音や絵を楽しむ絵本が多い 歌がある絵本
読み聞かせ前後の保育方法	導入方法	歌や手遊びをする 絵本の導入の大切さ 内容を復習する
	読み聞かせ後の振り返り 読み聞かせのタイミング	感想を話す クイズをする 次への活動につなげる 落ち着いた欲しい時 活動の切り替え場面 集まってもらいたいとき 活動と活動の合間
子ども理解	子どもの姿	子どもの言葉 子どもが夢中になる姿 楽しむ子どもの様子 真剣に聞く子どもの姿
	発達への理解	子どもの反応から発達に気付く 子どもとコミュニケーションが取れる
	絵本の効果	子どもの発達や感性を育む 創造力が豊かになる

#### 4. まとめと今後の課題

本研究により、保育学生は保育者による読み聞かせの場面を通して、読み聞かせに必要な知識や技術、環境構成、絵本の選定方法、そして子どもの姿や発達への理解など、多面的な学びを得ていることが明らかとなった。学生は、読み聞かせを単なる朗読行為としてではなく、子どもの発達を支援する教育的実践として捉えており、保育者の働きかけや環境の在り方にも深い関心を示していた。

今後の課題としては、実習を通じて得られたこれらの学びを、学生自身がどのように実際の保育において実践へとつなげていくかが重要である。読み聞かせに関する技術を習得するだけでなく、子どもへの応答性や環境設定への配慮を含めた総合的な保育力の育成が求められる。そのためには、模擬保育や演習、ロールプレイなどを通じて、実践的に学びを深める場の充実が必要であり、観察から得た気づきを内省し、具体的な実践力へと転換する支援体制の構築も求められる。

加えて、学生が日常的に絵本に親しむための習慣形成の支援も課題である。本研究では、読み聞かせの意義や技法に対する関心は高い一方で、「日頃から絵本を読んでいる」とする学生は少数にとどまっていた。これは、絵本に対する理解と実践力の乖離を示唆しており、日常的に絵本に触れる機会の創出が重要である。授業や課題において学生自身が絵本を選び、実際に読み、他者と共有する機会を設けることが、主体的な学びと内発的動機づけの促進につながるのではないかと考える。

また、ICTや映像教材の活用による読み聞かせ技法の可視化や、同世代の学生同士による相互評価型の演習なども、効果的な学びの深化につながる可能性がある。保育の現場で求められる実践力を着実に育成するためには、多角的な学習支援を通して、学びと実践を相互に関連付ける機会が不可欠である。

さらに、本研究は自由記述をもとに質的分析を行っており、記述内容には学生ごとの表現力や経験の差が反映されている可能性がある。また、観察を通して得られた学びと、実際の保育場面における読み聞かせの実践力との関係については十分に検討できておらず、今後の課題といえる。今後は、学生の読み聞かせに関する学びの変化や実践への定着を追跡する縦断的研究、また観察で得た学びが実践にどのように生かされているのかを検討する混合研究法的アプローチなどにより、さらなる実証的な検討を深めていくことが望まれる。

本研究は、保育者養成課程における読み聞かせ教育の意義を示すとともに、学生の学びを実践力へとつなげる教育的支援の在り方を考える上で一助となるものである。今後も、子どもの育ちに寄り添う読み聞かせの実践を支えるために、保育者養成のカリキュラムおよび教材開発のさらなる充実が望まれる。

#### 引用・参考文献

- ・ 厚生労働省（2017）保育所保育指針
- ・ 厚生労働省（2018）保育所保育指針解説 フレーベル館

- ・ 横山真貴子・水野千具沙（2008）保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義-5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から- 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 17. 41-51
- ・ 雨越康子・森下正修（2020）幼児期の集団および家庭における絵本の読み聞かせと認知能力 日本教育工学会論文誌 43(4). 339-350
- ・ 並木真理子（2012）幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響 日本保育学会保育学研究 50(2). 165-179
- ・ 佐々木宏子・富田喜代子・青悦美代（1994）絵本の読みきかせにおける読み方の研究(1) 日本保育学会大会研究論文集 47. 684-685

※本研究は、日本保育学会第78回大会において発表したものを加筆、再構成したものである。